

感染症疫学ハンドブック



評者

岡部 信彦 川崎市健康安全研究所長/元・国立感染症研究所感染症情報センター長

感染症疫学とは、文字通り感染症を対象として、その感染症が「1) 普通ではない状況にある時」「2) 予想外の問題が発生している時」「3) 社会的にインパクトがあり公衆衛生的対策が必要な時」「4) 迅速な対応が求められる時」などに、担当者が“発生現場で”その原因を追究し(犯人の特定とは異なる)、再発防止策を提言するために駆使する疫学です。これはすなわち、実地現場での疫学—FieldでのEpidemiology—である、と言えます。

近年エボラ出血熱、MERSなどが国内外で大きな話題となりましたが、そのような場面ではもちろん患者の診断と治療がまず重要です。診断と治療は医療の担当ですが、その拡大の防止、そして火を消し、再発防止のための方策を考えることが、実地疫学の担当になります。

かつて腸管出血性大腸菌感染症O157の大規模な広域集団発生があった時(1996年)、わが国には実地疫学を担当する専門家はおらず、当時の調査対策に当たった人々はほぞをかむ思いでした。この出来事を大きなきっかけとして1999年に伝染病予防法に代わって、「感染症の発生を予防し、及びそのまん延の防止を図り、もって公衆衛生の向上及び増進を図る」ことを最大の目的とした感染症法が施行されました。同時に新たに発足した国立感

染症研究所感染症情報センターでは、感染症のアウトブレイクに対応するための実地疫学者を育てるFETP-J(Field Epidemiology Training Program, Japan)をスタートさせました。本書・感染症疫学ハンドブックの監修者である谷口清州氏はそのFETPを立ち上げから担当した一人であり、編集の吉田真紀子氏・堀成美氏および各項目の執筆担当者は、皆FETP-J修了生です。FETP-Jは医師が多数ですが、臨床検査技師、薬剤師、看護師、獣医師など職種はさまざまです。

それぞれが自分たちの経験を伝え、明日の日本の実地疫学を育てようと思って作り出したのが本書で、その思いがあちこちに詰まっています。総論を書いて下さったJohn Kobayashi氏は実地疫学専門家として国際的によく知られている方で、長くFETP-Jの指導に当たられ、感染症疫学そしてField Epidemiologyはどういうものかを私たちにたたき込んでくれました。本書の帯には『「予見可能だったのではないか」「初動は適切だったか」—感染症アウトブレイク発生時のデータの集め方、解釈の仕方、伝え方を学んで、効果的な対策につなげるための実践書』とあります。職種を問わず「感染症を何とかしたい」という思いを持っている方、ぜひ本書をご一読下さい。

谷口 清州 監修、吉田真紀子・堀 成美 編

A5判/320頁/2015年/定価(本体3,400円+税)/ISBN978-4-260-02073-2/医学書院 刊